慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	P・F・ランガー、J・J・ザスロフ共著『北ベトナムとパテト・ラオ : ラオス内戦の協力者達』
Sub Title	P. F. Langer and J. J.Zasloff, North Vietnam and the Pathet Lao : partners in the struggle for Laos
Author	松本, 三郎(Matsumoto, Saburō)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1971
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.44, No.9 (1971. 9) ,p.145- 151
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19710915-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

教訓とは、ソビエト史の専門家の側から与えられるものではなく、一般の読者がそれぞれに読み取るものとされている。

（中沢精次郎）

Paul F. Langer and Joseph J. Zasloff,

North Vietnam and the Pathet Lao: Partners in the Struggle for Laos

Cambridge, Massachusetts, Harvard U.P., 1970, x+262pp.

P・F・ランガー、J・J・ザスロフ共著

『北ベトナムとパテト・ラオ——ラオス内戦の協力者達——』

1

本書は、ランド・コーポレーションの社会科学局において極東問題を担当しているランガー氏と、同じく東南アジア問題の専門家でありビッツバーグ大学の政治学教授であるザスロフ氏の共著になるものである。

長く歴史から忘れられていたラオスも、一九五四年、特に一九六一年のジュネーブ会議以後、国際社会の注目を浴びるようになってきた。それにもかかわらず、ラオスに関する学術的文献、特に独立以後十数年、内戦に明け暮れしてきたその国内情勢について分析した書物は非常に乏しい。本書は、この内戦の一方の立役者であるベトナム側と、その強力な支持者である北ベトナムとの関係を綿密な資料を追いながら明らかにしようとしたものである。特にベトナム・ラオ、北ベトナムあるいは北京やモスクワ等から得られた資料の分析と共に、五三名のパテト・ラオ軍及び北ベトナム軍の捕虜あるいは逃亡者とのインタビューの結果を豊富にこの研究の中に取り入れ、それによって従来ベールに包まれてきた共産主義運動内部の構造、機能を動的に伝えることに成功しており、それが、従来の研究にない奥行をこの書物に与えている。

さて、本書の内容は次の通りである。

1 Introduction

Part One The Past

2 The Setting of the Lao Revolutionary Movement

3 The Growth of the Lao Revolutionary Movement and the Vietnamese Role

4 The Drive for Independence: The Viet Minh and the Pathet Lao, 1949-1954

5 North Vietnam and the Lao Communists' Bid for Power, 1954-1962

Part Two The Present

6 The Context of the Current Struggle

7 North Vietnamese Advice and Support

8 The North Vietnamese Military Adviser in Laos: A First-

Hand Account
9 The North Vietnamese Military Presence
10 The Relationship, Public and Secret
11 An Assessment
Appendixes
A. Selective List of Persons Interviewed or Consulted
B. The Lao Communist Movement—A Basic Chronology
C. Partial List of Participants in the First Resistance Congress of Laos (August 13, 1950)
D. North Vietnamese Prisoners and Defectors in Laos Prior to the 1962 Geneva Conference

二

ラオスにおける革命運動の初期の歴史は今日に至るも未だ明確ではないが、ホー・チ・ミンの指導するベトナム共産主義者が、第二次大戦直後の時期からラオスの革命運動の創設とその活動に決定的な役割を果してきたことは明らかである。一九四六年から四九年にかけてのラオス共産主義運動の創設期に、幾つかのラオスの抵抗グループがラオス東部地帯に生き永らえ得たのは、偏にベトナム共産党の指導と援助によるところが大きかつた。更に一九五〇年にはこれらグループがベトミンの指導下に統合され、最初のラオス抵抗会議をベトナムの地で開いたのであつた。その後もベトミンはラオスのサムヌア地方——今日もラオス共産主義者の本拠地が置かれている——に最初の基地を建設するのを助け、それ以来もベトナム共産党の軍事的援助、勧告や助言が引き続き行なわれており、かくしてラオスの共産主義者は今やラオス全土の三分の二、全人口の三分の一を支配下に入れるまでに成長したのである。

さて、第一章の序論に続いて第二章はラオス民族運動の背景について述べている。ラオスの民族運動はその歴史の新らしさ、その弱さにおいて目立つているが、著者によればそれは (一)フランス植民支配が形式にとどまり深く浸透しなかつたこと (二)知識階級が非常に少なく、更にフランス支配をむしろベトナムやタイから圧迫を防いでくれるものとさえ受け取る者がいたこと (三)人種的多様性と対立のため、団結が非常に困難であつたこと (四)民族運動の中核となつていた自由ラオスが一九四九年に分裂したことによつて、民族運動が二分されて内部闘争を繰り返すことになつたこと (五)反仏運動に代つて唱えられた反米運動が国内分裂のため余り盛り上がらなかつたこと、などによる。

さて、著者はパテト・ラオの指導者スファヌボンの地位と役割に大きな関心を持ち、第三章の「ラオス民族運動の発展」では特にスファヌボン殿下に焦点をあて、彼の経歴を詳述した後、ペトサラートやスヴァナ・プーマ等異母兄弟と協力して一九四六年以後自由ラオス運動を展開していつた彼が、(一)フランスとの妥協により真の独立をかち得ることができるか、(二)ベトミンとの深い協力がラオスの将来にとつて果してプラスとなるのか、といつた基本問題で、穏健派の異母兄弟達と意見の対立を生み、ついに一九四九年五月、プー

マ等と袂を分かつて東西に分かれる運命に立ち至つた経違を詳述している。

その後スファヌボンは東部ラオスに帰つてベトミンの指導の下に同年初頭より抵抗運動を開始していたケイソンやヌハク等の率いる反仏抵抗グループに加わり、名目上その指導者として反仏抵抗運動を始めたのである。周知のごとくラオス共産主義運動は当初からベトナム共産党との密接な人的結びつきを持つてきた。その中では、輝かしい家柄、経歴等を持つスファヌボンが一貫して名目上の指導者となつてきたのであるが、実質的には、ケイソン、ヌハクといつたホー・チ・ミンの直接指導下に育つた生粋の共産主義者の方が、遙かに大きな信頼をハノイから受けていたことは注目すべきであると著者は指摘している。

さてベトミンとラオス左派との提携が公式のものとなつたのは、一九五一年二月のベトナム労働党結成大会の直後である。一九四五年公式には解散したインドシナ共産党の後継者として設立されたベトナム労働党の綱領は、反帝独立闘争のためのベトナム、ラオス、カンボジア三国人民の強力な団結を主張したが、その直後の三日に開かれた三国指導者会議は反仏、反米闘争を目的とするベトナム＝クメール＝パテト・ラオ三国同盟の結成を声明した。そして爾来一貫して展開されたベトミンのラオス支援の最大の成果が、一九五三年から一九五四年にかけて行なわれたラオス全域にわたる大軍事攻勢で、この結果パテト・ラオ軍はラオス北、東部に重要な実支配領域を確保し、交戦団体としての公民権をラオスにおいて獲得することとなつたのである（第四章）。

著者は第五章で、一九五四年から六二年にかけての北ベトナムとラオスの関係を二期に分けて述べている。先ず一九五四年のジュネーブ協定成立から五九年にかけての前期は、いわば平和共存の時期であり、北ベトナムはパテト・ラオのプーマ政権への参加に懐疑的ではあつたが干渉せず静観していた。「連立政府への参加によつて政治的に優利な立場に立ち得るならばそれも良し、但し失敗した場合にも備えて軍事的、政治的にパテト・ラオを強化すべく教育と訓練に力を注がねばならない」というのがこの時期の北ベトナムの基本的方針であつたようである。このために組織された北ベトナム側のラオス訓練機構として注目すべきものにベトナム顧問団「第一〇〇集団（Doan 100）」がある。その構成は著者の推定によれば図1のごときものであり、それは約二〇〇名の軍事顧問団と、一〇〇名の政治顧問団から成つていた。

一九五九年ジュネーブ会議後ラオスの右派、中立派、左派間に僅かに保たれていた協調は破れ内戦が再開されたが、それはまた北ベトナムの南ベトナム実力解放決意の時期と「偶然にも」一致した（p.七〇）。南ベトナムにおける解放戦争の再開は、北ベトナムの南への補給通路としてラオス東南部のいわゆるホーチミン・ルートの価値を高め、それを安全に確保することを必要ならしめた。かくしてパテト・ラオと北ベトナムとの間には再び固い運命共同体としての絆が結ばれ、この戦いは一九六二年ジュネーブ協定の成立に至るまで続いたのである。この内戦中ソ連の強大な援助が北ベトナムを通

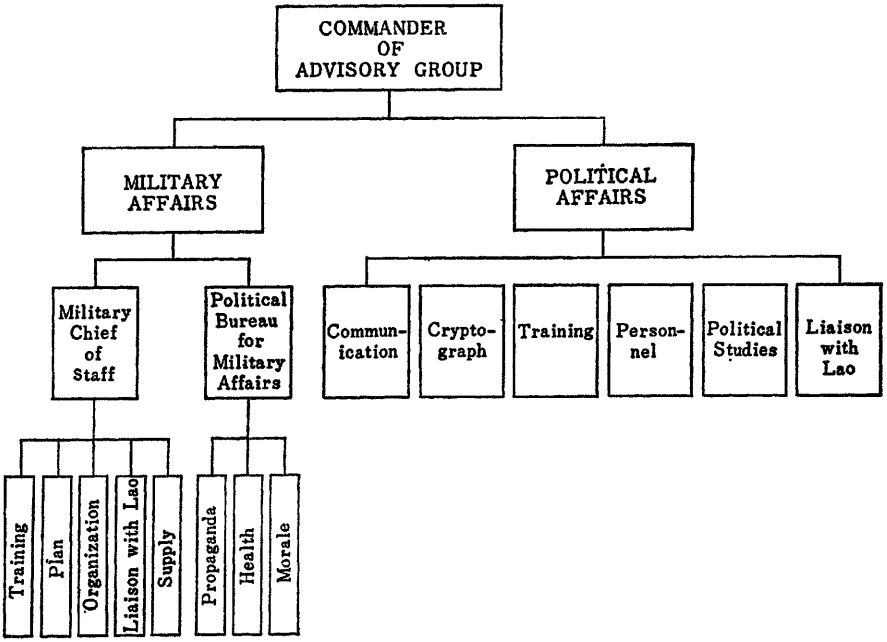

図1　ラオスのベトナム顧問団，第100集団，1954—1957

じ、パテト・ラオに手渡されたため、パテト・ラオ軍はその力を著しく増大し、戦いの終る時にはラオス全土の二分の一、人口にして二〇—三〇パーセントがパテト・ラオの支配下に入るまでに成長していた。同時にまたこのことは北ベトナムにとつても、㈠国境地帯の安全を確保すること、㈡ホーチミン・ルートの安全を確立することという二つの目的を果したという意味で重要な勝利を意味するものであつた。

第六章では、パテト・ラオという統一戦線内に占める共産主義者の役割の分析に力点が置かれている。特にラオスには共産党が存在するのか否かという論争をめぐつて著者は、既に一九五〇—五一年頃よりその実体が存在したが、一九五五年三月二二日に秘密裡ながら正式に設立されたラオス人民党（Phak Passon Lao）が生粋のマルクス・レーニン主義の政党であり、パテト・ラオ支配地域においては、表面上に出ているネオ・ラオ・ハク・サット（一九五六年一月に設立されたラオス愛国戦線）よりも、その中核となつているこのラオス人民党が実質的には権力を保持している、と判断する。同党が国際的に初めて顔を出し始めたのは一九六六年一二月頃からであるが、このことは同党が次第にパテト・ラオの中で公然たる発言権を有し始めたこと、そしてひいてはスファヌポンの実質的地位がその世界的名声にもかかわらず人民党書記長ケイソン等の下位に置かれ始めていること（p.九七）の間接的証明であると著者は受取つている。

一九六二年ジュネーブ会議後も、北ベトナムはラオス左派を支援するため大きな役割を演じてきた（第七章）。多数の政治及び軍事顧

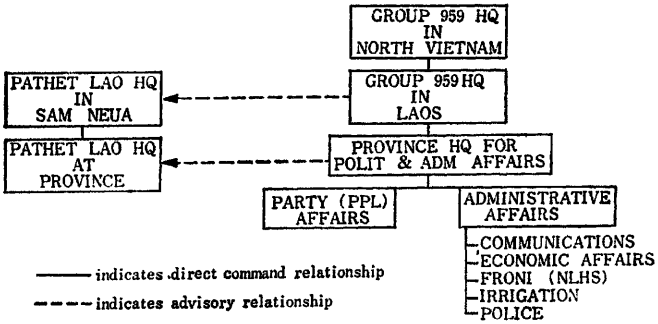

図2　ラオスのベトナム顧問団，第959集団

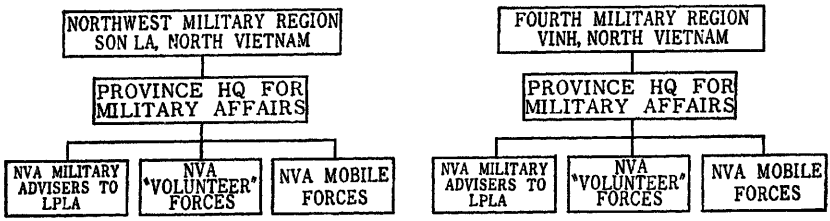

図3　ラオスにおける軍事活動のためのベトナム軍事構造

問団をラオスに派遣し、あるいは北ベトナムにおいてラオス左派の幹部の教育、訓練を行なつてきた。依然としてラオスからの留学は圧倒的に北ベトナムに向けられ、中国、ソ連に行く者は稀であつた。

この時期のラオス駐在ベトナム顧問団は二つに分かれ、一つは先の第一〇〇集団の流れを引く第九五九集団であり、それは図2のごとく政治、行政問題を担当している。他方、ラオス北部を担当する北西軍管区と、中、南部を担当する第四軍管区に分かれた軍事顧問団が図3のごとくラオスにおける軍事問題を担当した。通常、ラオス人民解放軍（LPLA）一大隊につき各一名の軍事及び政治顧問がつき、更にそれを補佐する各三乃至五名のベトナム顧問団がいたようである。彼等の主要任務は、ラオス左派幹部の訓練、補給輸送活動、医学を含む技術的援助、情宣活動等にあつた。

第八章は、一九六四年二月から一九六六年一二月までパテト・ラオ軍の政治顧問として活躍した一亡命北ベトナム軍大尉の陳述に基づく、ラオスにおける北ベトナム顧問団の役割を紹介したものであるが、「パテト・ラオ軍あるいはパテト・ラオの行政部における北ベトナム顧問は、港に船を運航する舵手のごときものである。パテト・ラオは船の乗組員であり、彼等は舵手の案内のままに進むのである」と教育され、控え目ながら、しかし断固として舵手の責任を全うすることを訓練され北ベトナム顧問団の、パテト・ラオに与えた影響は極めて大なるものがあつたと言うべきである。

一九六八年当時ラオス駐在の北ベトナム軍（NVA）は四万と言われたが、この中約二万五千がホーチミン・ルートに沿つて展開し、

同ルートの防衛、輸送等にあたつていた。残りの約一万五千がラオス人民解放軍の顧問（約七〇〇名）、輸送部隊、及び各州駐在の北ベトナム軍として活躍していた。現在では約六万七千の北ベトナム軍がラオス領内にいるものと推測されている。そしてこの北ベトナム軍の存在がパテト・ラオに強力な支援を与え今日のごとく全ラオスの三分の二、人口にして三分の一をその支配下に入れることに貢献してきたのであつた（第九章）。

さて、北ベトナムとパテト・ラオとの間には度々緊密な関係の表明、それぞれの立場の強い支持声明が出されているが、両者とも具体的協力関係の説明になると極めて慎重であり、北ベトナム軍のラオス領内における活動を秘してきた（第一〇章）。また北ベトナムはラオス問題をパリ会議にかけることには強く反対しており、当事者原則を貫くべきことを主張しているが、これは国際社会でラオスにおける北ベトナム軍の存在が問題にされることを嫌つていることもその一つの理由になつているようである。いずれにせよラオス内戦はベトナムの紛争と余りにも深く関係しており、ベトナム問題が解決されることなくしてラオスの内戦が解決することは、著しく困難であるというのが著者の結論の一つである。

三

本書は、従来も予想されていたことではあつたが、その具体的例証に乏しくベールに閉ざされがちであつた北ベトナムとラオスの密接な結びつきを、貴重な資料を駆使しつつ明らかにすることに成功しており、高く評価さるべき書物である。

確かに一九四九年から五〇年にかけて、アメリカがフランスのインドシナ政策を原則的には支持する方針を打ち出した時、「フランスとの徹底的抗戦の後にのみ真のラオスの独立は勝ち取られるのだ」と考えるラオス左派にとつて頼るべきものは北ベトナム以外になかつたのであり、爾来二〇年それはラオスに伝統的なベトナム不信の感情を超越して、両者の関係を緊密不可分のものとしてきたのであつた。ベトナム側から見た場合、ラオス左派支援の背後には、著者の指摘するごとく三つの基本的目標がある。第一にはベトナム西部の国境隣接地帯を緩衝地化し、自国の安全保障を確保すること、第二には特に一九五九年以後重要になつたのであるが、ホーチミン・ルートとして知られる南ベトナムの補給ルートの確保があり、そして第三にはラオスに北ベトナムと同質の共産主義体制を樹立することである。

最近のベトナム情勢の進展は予断を許さぬものがあるが、南ベトナムにおける紛争の解決方法のいかんによつては北ベトナムにとつてホーチミン・ルート確保の必要性は消滅するであろう。しかし北ベトナムとラオスの国境地帯、特にフォン・サリ、サム・ヌア、シェン・クアンといつたラオス領が反対勢力によつて支配されないこと、及び過去二〇年間共同して戦つてきたラオス左派の政治闘争を支持することの二つは、ハノイにとつて容易に放棄し得ない政策として今後も残るであろう。

言うまでもなくラオス、カンボジアにおける内戦の解決は、ベト

ナム戦争の処理方法のいかんによって殆んど決定的な影響を受けるものと思われるが、その後に登場する政治的形体がどのようなものとなるかは、新しく成立するであろう連立政権（ラオスにおいては二度の失敗の経験がある）がいかにして構成され機能するのか、そして特に左派内部において誰が民族統一戦線の真の担い手となるのか——生粋の共産主義者か否か——によって大きく変つてくる。その点について著者は、ラオス愛国戦線内部におけるスファヌボン議長のラオス人民党書記長（愛国戦線副議長）ケイソンに対する力の相対的下落を指摘し、中共型の「共産党の指導する民族統一戦線」に決定的に進みつつあると見ているようである。確かにカンボジアにおいても赤色クメールに対するシアヌークの相対的力の下落が伝えられているが、しかし一方では南ベトナムでも示されつつあるごとく、必ずしも共産党が指導しない民族統一戦線の持つ力の偉大さという面も再認識されつつあり、ラオスやカンボジアの将来の政局がこのソ連型統一戦線に向かう可能性も相当に残されていると見るべきではなかろうか。

今一つ指摘しておきたいのは、北ベトナムとラオス左派間の密接な結びつきは正に著者の言うごとく唇歯の関係にあるが、なおラオス人の中にある伝統的反ベトナム感情は根強く、ラオス右派はもとより左派の中からも、ラオス・ナショナリズムの爆発という形で表明される可能性をはらんでおり、ベトナム、ラオス関係を考察する際常に考慮に入れておかねばならないということである。

（松本三郎）

W. A. E. Skurnik ed.,
African Political Thought: Lumumba, Nkrumah, and Touré
Denver, Colorado: University of Denver, 1968, 147pp.

W・A・E・スカーニック編
『アフリカの政治思想——ルムンバ、エンクルマ、トゥーレ——』

本書は、現代アフリカをある意味で象徴する三人の政治指導者をとりあげ、その政治的イデオロギーを比較・検討しようと試みたものである。

一般に、比較研究を試みる場合、その研究の「対象」——それは当然複数の「対象」ということになるが——のあいだに類似性と異質性が予想されるわけであるが、本書の研究対象である三人のアフリカ政治指導者についても、「ラディカル」であるという類似性と、ベルギー（ルムンバ）、イギリス（エンクルマ）、フランス（トゥーレ）という異つた宗主国の植民地支配のもとでナショナリズム運動を指導したという異質性を識別することができる。

おそらく本書の編者は、ルムンバ、エンクルマ、トゥーレという三人の政治指導者がもつ右のような類似性と異質性によつて「アフ